



マクベス夫人の人形を手に、クラルテのアトリエにて

「わぁ、絵本のブタさん本当に居たんだ!」。いつもお家で読んでいた絵本の世界が、目の前に飛び出してきた。喜んで舞台に駆け寄っていく子、目を真ん丸くして固まっている子、びっくりしてワンワン泣いている子…。子どもたちの五感を刺激し、夢を膨らませる人形劇。子どもたちと夢を分かち合いながら歩んできた人形劇団「クラルテ」は2008年2月、創立60周年を迎える。劇団代表の高平和子さん(54)は「子どもたちと共感できる作品を創り続けたい」と全国を飛び回っている。

迷いなく人形劇の世界へ

大阪を拠点とするクラルテは1948年2月、戦後の日本を文化の力で元気にしようと発足。劇団名は伝説の「光明」の意で、第一次世界大戦後の国際平和運動「クラルテ運動」に由来する。

高平さんがクラルテに出会ったのは、地元・北海道の高校に通っていた頃だ。「小学5年生の時から友達と人形劇団を作って上演していたけれど、人形劇を仕事にできることを知って驚いた。クラルテの舞台を見て、生きていく力や優しさを感じ、絶対にやりたいと思った」。

親の反対を押し切り、高校卒業後に強引に入団。「北海道を離れる日、両親は泣いていたけれど、私はルンルンだった。初めはホームシックになってすぐ帰るかなと思っていたけれど、もう36年も居る(笑)」。

伝統を未来に引き継ぐ

現在団員は40人。28人の役者のほか、制作や営業、事務スタッフら全員で人形作りから舞台美術、脚本、広報活動などすべてを協力して行っている。創立当初のメンバーもおおし 20~70代の世代を超えた老若男女が夢の舞台を創っている。

クラルテの人形は木彫りだ。桐の丸太を使い、能面を打つように顔を作っていく。中はくり貫き、「魂」は役者が入れる。「先輩たちは人形を作るために新聞紙を溶かして糊を作るなど、苦労を重ねてきた。試行錯誤を繰り返して築かれた技術が代々受け継がれている」。劇団の大切な財産である。

人形遣いが目立たないように工夫し、人形だけで舞台を作ることにこだわる。人形が織り成すドラマの中で、子どもたちが創造して心に感じる世界を創り出すためだ。上演後には人形に向かって「ありがとう」と手を振る子どもたち。その姿が活動の励みである。

人形劇専用の劇場を

近年は大人向けの作品として近松門左衛門やシェイクスピアなどの名作にも取り組む。「日本にはまだ人形劇は子どものものという概念があるけれど、ヨーロッパでは大人のための人形劇フェスティバルもある。さまざまなレパートリーをそろえて親子で語り継がれる作品を残していきたい」。

オフの時間も筋トレや公演の広報活動、自主練習などに当てる。狂言の勉強は15年続けているという。人形劇一筋できたその信念の源は「限らない可能性を秘めた不思議な世界」への探究心だ。「人間の内面を表現したり、動物を演じたり、どんな世界も人形で表現できる。そこが面白い」。

夢は人形劇専用の劇場を作ることだ。「先輩たちが築いてきた現代人形劇というジャンルを多くの人に伝えていくのが私の役目。クラルテの伝統を次世代に継承し、日本中の子どもたちが生の芝居に日常的に触れられる環境を作りたい」。無垢な笑顔をキラキラと輝かせる。

(文:江中咲紀 / 表紙写真:高島悠介)

CLOSE
クローズアップ
UP

可無人 能限形 性に劇 に広一 魅が筋 せらる35 られて年

プロフィール

人形劇団「クラルテ」代表

たかひら かずこ
高平 和子 さん



1953年7月、札幌市南区定山溪温泉生まれ。72年高等学校卒業後、クラルテ入団。2005年から劇団代表に就任する。2人で演じる作品を中心に、日本全国・海外で公演。演出や指導にも携わる。2007年7月にはシェイクスピア「マクベス」でマクベス夫人を好演。(問い合わせ先:クラルテ TEL6685-5601)

【公演案内】

第101回こどもの劇場「11びきのねことぶた」
12月24日エルシアター、2008年1月19日
大阪市立こども文化センターほか
「いちよう並木」12・1月合併号を
持参の方は10%割引。

おひさま劇場
創立60周年を記念して、2008年3月20日
から約1ヶ月、大阪市内の区民センターや神社、
お菓子屋さん、カフェレストラン、画廊など
60か所で公演。